

## 9. 循環器疾患と加齢

放射線影響研究所臨床研究部

佐々木 英 夫

放影研では、これまで心血管疾患と加齢に関する臨床研究として脳血管疾患及び虚血性心疾患を取り上げ研究を行ってきた。その研究の骨子は、① 発生率及びその年次推移、② 危険因子との関連性である。研究の対象は成人健康調査集団で、約2万人から成っているが、このうち約1万6千人が昭和33年からの2年ごとの検診を少なくとも1回以上受けており、本研究の実際の調査対象となった。

脳血管疾患としては脳梗塞、脳出血及びクモ膜下出血を扱い、虚血性心疾患としては労作狭心症と心筋梗塞を取り扱った。

### 1. 脳血管疾患

脳血管疾患については、昭和33年より53年までの20年間の調査が完了している。この期間内に新たに発生した症例は広島の人322人、女264人、長崎の男108人、女64人の合計758人に認められた。

発生率の年次推移をみると、昭和35年から38年あたりをピークに、以後順調に減少しており、その減少は特に脳出血に著しい。年齢別にみても40歳代から70歳代まで、各年齢相にわたって共通して減少傾向がみられている。また、男女とも、広島・長崎ともに同様の傾向がみられ、脳血管疾患の減少は少なくともこの調査期間内では、病型別、年齢別、性別、都市別に共通してみられているといえる。

危険因子としては、昭和33年より49年までの16年間の症例について解析がなされてい

るが、それによると危険因子として、脳出血では収縮期血圧、拡張期血圧、心電図左室肥大、蛋白尿等が重要であり、脳梗塞では、収縮期血圧、心電図左室肥大、蛋白尿等、糖尿病等がそれぞれ危険因子として重要と判明した。

### 2. 虚血性心疾患

虚血性心疾患については、昭和33年より59年までの26年間の調査が完了している。この期間内に新たに発生した症例は、狭心症は広島の人75人、女76人、長崎の男32人、女15人の合計198人に、心筋梗塞は広島の人164人、女125人、長崎の男51人、女20人の合計360人に認められた。

発生率の年次推移をみると、心筋梗塞はこの26年間、発生率はほとんど変化はなくほぼ一定で、発生率は1.25/1000人年で、危ぐされているほどの増加傾向は認められなかった。

危険因子に関しては、昭和33年より53年までの20年間に発生した症例について解析がなされているが、それによると収縮期血圧、コレステロール、喫煙、尿糖、心電図異常にそれぞれ危険因子としての関与が認められた。

本調査集団においては、危険因子を有する者が増加していることから、今後の虚血性疾患の増加が依然として危ぐされる。